

第3回アジア養蜂研究協会 大会に参加して

今野 末次・市川 直子・小原 慎司

「第3回アジア養蜂研究協会大会とベトナム魅惑のアンコールワットの旅」のグループの一員として参加した。

6日、ベトナムのホーチミン空港着は15時30分、発着機も少ない閑散とした雰囲気、多少の寂しさを感じながらのベトナム入り第一歩であった。ハノイの大会会場には午後8時着、大会前夜祭が最高潮に達していた。

7日、午前9時より盛大に開会式が行われた。ロビー等では、養蜂具、各種養蜂製品の展示があり、中でも、ネパール展示品の中に麦稈を編んで作った巣箱やポリバケツ改造した分離器具がみられ、感心させられた。午後、市内見学に出る。乾期とはいえ、まだ湿度も高く蒸し暑い。古くから政治・文化の中心として栄えてきた首都ハノイは、街並みが大きな街路樹の緑に囲まれた、歴史の深さを感じる街であった。中でも、歴史遺産として貴重なベトナム最古の大学であった文廟、一柱寺、ホーチミンの遺体が安置されているホーチミン廟など、見逃すことのできない名所だ。自動車での走行は、自転車、バイクなどが道いっぱいになって走っており、その中へクラクションを鳴らし、新たな進



図1 ハノイの街並み



図2 麦わらで編んだ巣箱

入路を見つけて走るといった具合で、なかなか大変である。ブレーキよりクラクションの大きな音の方が重要という、案内人の説明が、その現実から納得できた。

(〒979-15 双葉郡浪江町西台字坂下 12-3

今野 末次)

第3回アジア養蜂研究協会大会に参加するためベトナムへ行った。ベトナム養蜂の見学やベトナムの国風、そして“食”にも期待しつつ、何よりこの AAA で何かを得たいと単純にそう思って参加を決めた。

開催当日、養蜂界の第一線で活躍する諸外国の研究者が集まり、いよいよ始まるという緊張感と期待で胸がいっぱいになった。開催準備が始まって、以降連日、ハガキやポスター等の販売、またビデオおよびスライド発表、ポスターセッションにも足を運んで、あますところなく会議に参加した。もちろん共通語の英語は、私にとっての壁であり苦勞を要した。しかしある時をきっかけにそれが変わった。

3日目を迎え、ベトナムに来たからには、発表の成果を研究者に直接聞かないままでは帰れないと思った。思ったら即実行、思い切ってポスターセッションでの質問を試みた。正直言って、私の単語を並べただけのつたない英語で、しかも素朴な疑問には、ゆっくりと初心者向けの対応をしてくたさるだろうと予想した。しかし実際は、ストレートに容赦なく自分の意見をぶつけてくる。どんな疑問にも自分の意見を主張しながら、それでも異論には非常に興味深く耳を

傾けてくれる。私は目の覚めるような思いがし、そして何よりうれしかった。

「感じることは変わること。変わること学ぶことである。」という言葉がある。今回得たものは、私なりの自分発見だったように思う。自然体でいられる自分自身とそこからくる向上心。ベトナムでのAAAを通しこれは、人やものとの出会い、関わりによって変化していくものと再確認した。そして自分の意見を持つことで人の気持ちも初めて見えてくるように思う。想像以上の目的達成であり、多くのことを学べた。

(〒194 町田市玉川学園6-1-1 玉川大学
市川 直子)

この第3回アジア養蜂研究協会大会に参加することにより、私は初めてベトナムへ行くことになった。しかも、私は海外へ行くことは初めてであり、出発前夜は期待と不安で眠れないほどであった。

まず東京からタイへ。バンコクで一泊し、翌日ハノイに向けて出発した。飛行機内でハノイ空港到着のアナウンスがあっても、下は見下ろす限りの畑・畑…?「何処に空港があるの?何という国なの?」これが第一の感想である。すると飛行機は畑のど真ん中にある空港に到着した。入国の手続きを済ませ外に出ると、一斉に5~10才ぐらいの子供たちがポストカードや地図を買ってくれと押し寄せてくる。すべての誘いを断り車に入り、一息をつき「とんでもない所にきてしまった。」と、思いながら車はすでにハノイ市内に向けて動いていた。



図3 人気を博した韓国のブース



図4 玉川大のブースで活躍する学生たち

会議を行っている間、私は玉川大学のブースでポストカードやポスターなどの売り子をしていましたが、ときどきセッションやビデオ等の発表などをのぞいた。私は英語は得意というより不得意であり発表を聞いても解らないだろうと思ったが、聞いてみると何となくだか解るのである。不思議である。日本で聞く英語よりすぐ聞き易く、少し英語に自信がついた気がした。どんな言葉でも人がしゃべることを一生懸命聞くことはすぐ大切だとつくづく実感した。

会議は3日間の日程を終え、ベトナム最終日にハノイ近郊への日帰り小旅行に出るとき、乗り込むバスを先生や仲間と離れ他のバスに乗り込んだ。いろいろな人と話をするための一大決心をしたのだが、そのバスに入ってくるのはすべて日本人であった。日本人の専用車になったらしく、がっかりした反面少しほっとした。目的地に着き自由行動になったとき現地の子供たちと仲良くなり、一枚写真を取った。この時の写真は自分の宝物になりそうである。

すべての日程を終えて日本へ帰国するとき、「言葉が通じないから海外へ行くのはいやだ」と思っていた自分がいかに小さかったことに気がついた。このアジア養蜂研究協会大会への参加は自分の研究等の勉強にもなったが、それ以上の大きな収穫があった旅行であった。

(〒194 町田市玉川学園6-1-1 玉川大学
小原 慎司)